

つさいあいご

たくさんの方にお越しいただきましてありがとうございます。五回目の対話集会ですが、柴田先生に、「五回全部挨拶をした」と言われて驚きました。同時に、「しまった」とも思いました。去年、二昨年、どんな挨拶をしたか覚えていないということに気が付いたからです。同じことを言うかもしれない。ただ、この生物多様性というキーワードがこの対話集会に現れたのは、多分初めてだと思いますので、この話をすれば、ダブることはないだろうと思います。

私自身は、地球科学をやっていますから、生物の分野には弱いわけです。この生物多様性という言葉が最初に知ったのは井上民次さんの講義録でした。飛行機事故で亡くなられたのですが、そのときすでに、NHKの講義の用意ができていて、後に本になって出版されました。そこに、生物多様性という言葉が現れました。その十二回の講義の後ろのほうが、生物多様性の問題をしっかり論じた内容になっていたというのが記憶に残っております。もう一つは、理学研究科長として白浜の施設を見に行ったときに、白山先生が、その頃からその先生だったわけですが、わざわざ駆けつけてくださって、生物多様性、「センサス」の話を詳しくしてくださいました。生物多様性というのが非常に大事な二十一世紀のキーワードになるといえるのは、その時身にしみまして、それだけによく覚えていられるわけです。

先ほど白山先生が、種がどんどん発見されて増えていくというお話をされました。けれども、私は地球科学の立場から、この生物多様性を生み出してきた地球の歴史というのを、この集会に関係される皆さんには、もう少し深める機会を作ってほしいなあと願っております。

先ほど、二階のパネル展示をざっと拝見しました。地球の歴史は、どう扱われているのかというと、せいぜい琵琶湖の、四〇〇万年の歴史が紹介されているくらいです。琵琶湖の話は最近の活断層連



尾池 和夫

おいけ かずお

京都大学総長

動のことです。比良が上がって、琵琶湖が下がって、京都府南部が下がって、伊賀盆地のほうが上がっているという、そういう活断層運動があるために、大地が傾いて、琵琶湖が四〇〇万年の間にだんだん北へ寄ってきたわけです。そういう最近の運動によって、琵琶湖の生態の話をしているわけです。

でも、生物そのものの歴史は、もともと長いわけです。たとえば、七〇〇〇万年前には日本海が広がり始めて、大陸の端っこから、日本列島がバリバリと切り離されて、いまの島になったとか。そういう歴史の中で、どういふふうに生物が変わってきたかとか。そのもうちょっと前、一億二千万年くらい前は石油や石炭が大量に生産された時代で、地球上の平均気温が今より二〇℃くらい高かった。それを地球は、自分で温度を下げて、いまの地球になったわけです。そんな中でどういふふうに変化してきたのかとか。

あるいは、いまのような生物のシステムが、二〇億年とか、その辺からできあがってきたのでしょうか、けれども、そもそも生物はもともと前、地球全体の歴史は四十六億年ですが、四〇億年くらい前には、もうバクテリアの仲間が発生するわけです。そこからずーっと、バクテリアのような単細胞の生物が地球を占めていて、そして十数億年前には、いろんな生物が現れてきたという歴史があります。その歴史の中で、何回か大量に絶滅しているということも分かっています。そういう絶滅の歴史とか、発生の歴史とか、いろんなことがあった四十六億年の地球の歴史の中で、この生物多様性の問題を議論していかないといけないだろう、と私は思っています。

そういうふうな発展していく一つのステップとして、今日のこの集会在役に立てばと願っています。いろんな立場、いろんな方が聞いてくださっていると幸いですので、それぞれの立場からまたあとで発言をしていただければと存じます。ありがとうございます。